

未来の子どもたちに「生命輝く地球」を引き継ぐために ～愛と知、活動の輪を愛知から～

グループ名：生物多様性

メンバー：岩田喜久、大川秀樹、杳名智彦、丹羽庸介

チュータ：九里徳泰、義家亮

1. 現状の把握（課題認識）

生物多様性は人間社会の全ての活動を支える基盤であり、全ての人や企業に関係のある問題であるが、表1、2のとおり認知度、関心度とも高くはない。

生物多様性を含む環境問題は、いわば人間活動の副作用として発生するが、人間の「欲」の追求の結果、現在では「持続可能な社会」の実現なしには人類の存続も危惧される状況となっている。

最小のエネルギーで完璧な循環を実現する自然、長年の淘汰を経て精緻な機能等を獲得した生物は、低エネルギー、脱石油、再生可能資源利用等の面で、人間が希求するものを既に所有している。この点からすれば、生物多様性の損失は学ぶべき対象・可能性の喪失と捉えることができる。

しかし、何より人間も生物も、森・土壌・水のつながりに支えられた世界の上に、「つながり」の一部として生存しており、「自然の恵み」なしには生きられない。

正にこれこそが生物多様性の保全の取組

みが必要な理由である。年間約4万種もの生物が絶滅し、人間を支える基盤そのものが危うくなっている現実を直視し、速やかに対策を取ることが必要である。

南北に長く、豊かな緑に覆われた日本には、多様な気候と複雑な地形もあって、多くの動植物が生息しており、固有種の比率も高い。日本の原風景ともいえる里山は国土の約4割を占め、絶滅危惧種の約半数がそこに棲むといわれている。このため、日本で生物多様性の問題に取り組むときに、里山の問題を切り離して考えることは適切でない。

しかし、里山の荒廃は、自然に対する人間の適切な働き掛けがなくなったことが大き

表1 愛知県民の生物多様性の認知度

かなり知っている	1.5%
ある程度知っている	10.9%
あまり知らないが、これから知りたい	27.3%
あまり知らない	45.1%
殆ど知らないし、今後も知りたくない	14.0%
回答なし	1.3%

【資料】H20年度県政世論調査報告書(愛知県)

表2 生物多様性保全と企業活動についての
全国の企業の考え方

自社の企業活動と大いに関連性があり、重要視	13.0%
自社の企業活動と関連性はあるが、それほど重要視していない	11.0%
重要だが、自社の企業活動との関連性は低い	71.4%
その他	3.4%
回答なし	1.1%

【資料】H19年度環境にやさしい企業行動調査(環境省)

な原因であり、人間の関与を排除することでは問題は解決しない。以前の姿に戻すのか、自然の遷移に任せるのか、農林業、後継者、コミュニティ等の問題を含めて、「地域」を総合的に考えることが必要な難しい課題であるといえる。

また、愛知県は海から山まで豊かな自然に恵まれており、市町村の境界を跨いで生態系、生息域が存在している。このため、愛知県全体を一括りにした対策や、市町村単位の細切れの対策だけでは、生物多様性の問題に適切に対応することは困難である。

更に、細かく見れば、開発等による水・緑・生態系の分断、コンクリート護岸・水路と田の段差による水と陸の分断等の問題がある。他にも、消費者の求める「規格品」を作るために農薬が不可欠な現実、生物多様性保全のための素晴らしい活動も点に止まり、横の「つながり」や広がりには欠けること、施策間の連携の欠如等も挙げることができる。

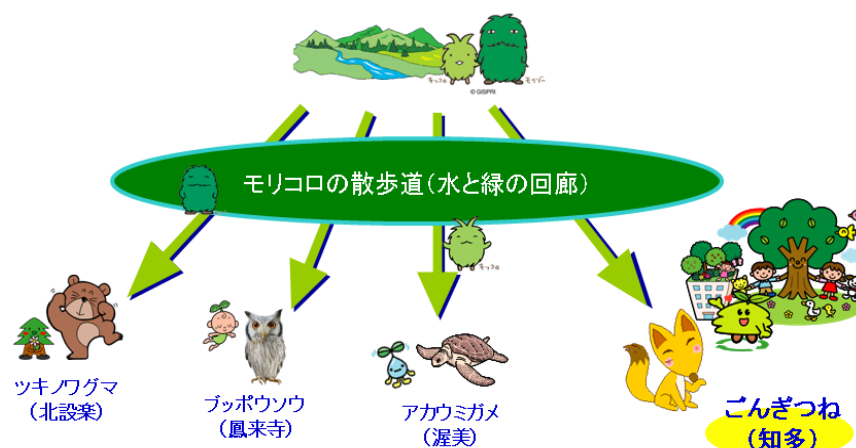
「つながり」の中で生きる生物の問題に取り組むためには、以上指摘した「つながり」を踏まえて問題を捉え、対策を考えることが不可欠である。

2. 2030年に向けての提言の概要

「あいち自然環境保全戦略」を具現化し、市町村の枠組を越えた「地域」の「つながり」による生物多様性の保全を県内各所で推進するため、「モリゾー・キッコロの遊び場づくり計画」の策定を提言する。

本計画は、市町村に対し生物多様性を機軸とする地域計画の立案・参加を呼び掛けるための「計画のための計画」であり、そのイメージは図1のとおりである。なお、この計画は公園等の「施設」の建設を目指すものではなく、これにより直ちに具体的な工事等が発生するものではないため、当面の県財政への影響は些少である。

図1 「モリゾー・キッコロの遊び場づくり計画」のイメージ



- ◎ 県内に廻らされた散歩道(水と緑の回廊)を通り、モリゾー・キッコロが自由に各地に棲む「仲間」を訪ね、豊かな自然の中で一緒に楽しく遊ぶ
- ◎ そこには輝く生命が満ち溢れ、自然と調和する豊かな暮らしと文化がある

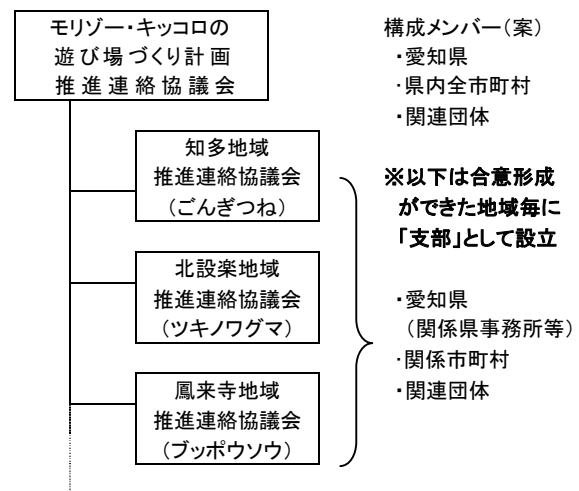
3. 提案の内容

(1) 基本的な考え方

計画推進及び全体の調整等を行うため、予め県、市町村、関連団体により「モリゾー・キッコロの遊び場づくり計画推進連絡協議会」を設立する。(図2参照)なお、次の4点を計画推進の理念とする。

- ① 人間活動を含めた生態系
- ② 人間と自然の共進化
(※人間が自然に働き掛けた結果生じる変化を検証して活動や社会を変革)
- ③ 一体的な都市圏(地域循環圏)
- ④ 結果的に保全に繋がる行動(※動機、主体、方法は様々で構わない)

図2 組織構成のイメージ



(2) 愛知県の役割

県は「あいち自然環境保全戦略」、「県土生態系ネットワーク形成方針概念図」作成時の調査資料等をもとに、生物多様性を機軸とする地域計画の素案を作成し、前述の推進連絡協議会で市町村に対し個別計画(素案)への参加、若しくは独自計画の立案を呼び掛ける。なお、素案作成に際しては、次の2点に留意する。

- ① 地域の特性(経済面も含めて)を踏まえて地域ブロック(案)を決定する
- ② 地域毎に「地域」が結集するための象徴(案)を決定する

※子どもから大人まで結集し、活動を継続させるためには、地域の身近な生き物が望ましい(地域の状況により河川等でも可)

(3) 各地域の役割

計画立案・参加の合意形成ができた地域毎に、支部として個別の地域計画に係る推進連絡協議会を設立する。(図2)各地域の推進連絡協議会では計画案と施策の整合性のチェックを行い、一定のフィードバックが掛かる体制を整備する。また、多様な主体の協働・連携により、計画段階から広範な意見、知恵を結集し、ビジョンを共有した各主体の自律的、主体的な活動を促す。これらにより、自ら課題を見つけ解決できる「地域」の育成を図り、広範できめ細かい対策の実現を目指す。(生物多様性に係る危機回避後も持続的な地域活動及び環境リーダーが残ることを目標とする)

4. 提案実現のための具体的な取り組み(アクションプラン)と実現可能性

(1) 地域計画の具体例として、「ごんぎつねの里山づくりプロジェクト」(知多地域モデル)を提案する。その概要を以下に示す。

【主体】愛知県、知多5市5町(半田市、常滑市、東海市、大府市、知多市、阿久比町、東浦町、南知多町、美浜町、武豊町)

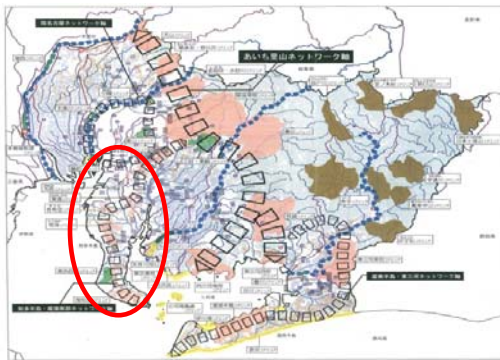
- 【目的】① 里山と水辺を中核とした生態系ネットワークの形成
 ② 生き物も人間も住みやすい環境づくり
 ③ 知多地域特有の自然・産業を本プロジェクトを横串につなぎ合わせて以下を実現
1. 地域ブランドの確立（「食べていける農業」の実現）
 2. 「新たな童話」の礎となる文化の醸成
 3. 地域循環圏の構築

※「地域」が結集する象徴として「ごんぎつね」を位置付け、ハッピーエンドで終わる童話の舞台（人と生き物が仲良く共存する豊かな地域）づくりを目指す。

※本プロジェクトにより保存を図る種の一例は次のとおりである。

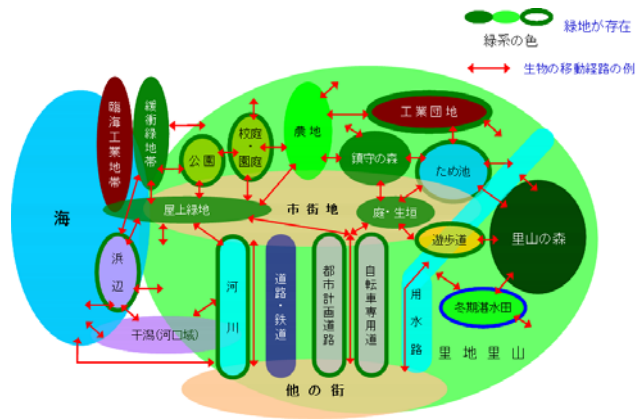
キツネ、タヌキ、オオタカ、ヒメウ、ヒメタイコウチ、トラフトンボ、マメナシ、シラタマホシクサ（※オオタカはアンブレラ種）

図3 県土生態系ネットワーク



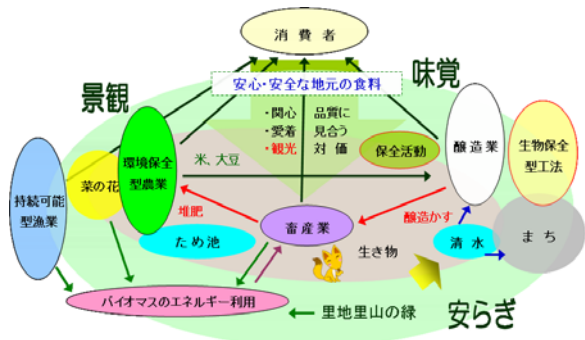
【資料】県土生態系ネットワーク形成方針
 概念図(愛知県)

図4 知多地域の生態系ネットワーク（概念図）



知多地域は図3に示すとおり、県土生態系ネットワークにおける「知多半島・尾張南部ネットワーク軸」の一角として位置付けられる。本プロジェクトの実施により、更に図4に示すとおり、知多地域内における里山と水辺を中核とする生態系ネットワーク（モリコロがやって来られる散歩道、遊び場）の形成を図る。また、図5には産業等のつながりのイメージを示した。スペースの関係上、商業や流通は省略してあるが、無農薬・低農薬等の環境保全型農業、「早獲り競争」ではなく科学的知見に基づいた漁獲枠設定とその遵守等の持続可能型漁業への転換を進め、畜産、醸造等知多地域特有の産業等を地域内でつなぐことで、生物多様性保全や資源循環の推進を

図5 産業等のつながりのイメージ



目指すものである。

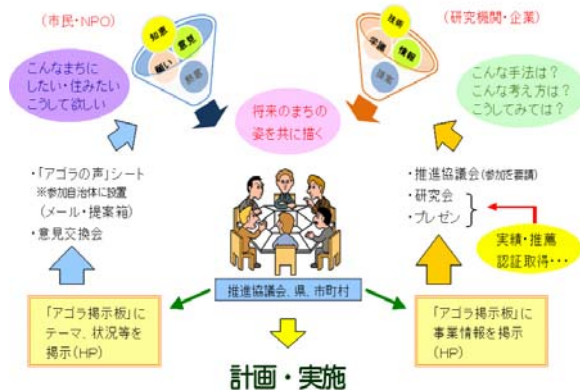
農林水産業の未来は、結局のところ消費者の意識に大きく左右されるが、「安さ」が全てに優先する状況であれば、このモデルの成立は困難である。しかし、「環境」と「経済」が両立している事例もある。豊岡市のコウノトリ、佐渡市のトキを巡る取組みがその典型といえるが、この2市では餌場確保のため農薬や化学肥料の使用を制限する一方、自主検査体制の整備や情報公開等の基準を満たす農産物を認証し、地域ブランド化することに成功している。何れも農産物の「安心・安全」が消費者に評価され、通常の1.2倍から1.7倍もの価格で販売されており、経営面のメリットからこの取組みに参加する農家も増加している。その他、冬期湛水や魚道の確保にも努めた結果、取り組んだ地域にはドジョウを始め多くの生き物が戻っている。

消費者への訴求力、イメージの付与という見地からも、「ごんぎつね」等の象徴は不可欠であるが、世界的な水の問題、それも含めての食料問題、食料安保、消費者の安心・安全志向等を考え合わせれば、実現の可能性は必ずしも低くないと考える。

- (2) 「ごんぎつねの里山づくりプロジェクト」の成功のためには、「地域」の人々の理解と協力が不可欠である。限られた予算内で、「地域」の状況を踏まえたきめ細かい対策を取るためには、旧来の「こう決まったから協力を」式のアプローチではなく、計画段階から多様な主体が参加し、ビジョンを共有しておくことが必要である。

そのために地域計画に従属する施策として「愛知みんなのアゴラ」の創設を提言する。そのイメージは図6のとおりである。住民等の知恵と想い、企業等の技術、情報を集めるためにも、コミュニケーションの機会、場が必要である。

図6 「愛知みんなのアゴラ」のイメージ



- (3) 知多地域においても、「食べていけない農業」のために耕作放棄地が増加し、「規格」や効率の面から農薬の使用も継続している。前述の2市では餌場の確保（環境）と農業経営の両立を図るため、認証制度を創設し効果を上げている。これに倣い、環境と経済の両立を図るため、地域計画に従属する施策として「あいちモリコロ認証制度」の創設を提言する。生物多様性保全に資する産品を県が認証することで、安心、安全な愛知ブランド（若しくは地域ブランド）を確立し、付加価値向上と経営安定化を図る。（商標登録を推奨）なお、県内各地の状況に対応するため、間伐材を使用した紙等、農産物以外の産品も同制度の対象とする。認証基準は、先行事例を参考に同等以上の内容とする。
- (4) 生物種の絶滅は不可逆的な事態であるため、地域計画の策定の有無に関わらず、今でき

ることから速やかに対策を取ることが必要である。「水と緑の回廊」づくりにも寄与するものとして、環境に配慮した工法、対策を積極的に推進することを提案する。なお、本提案は地域計画推進に寄与する方策ではあるが、従属関係にはない。以下に具体例を示す。①法面保護、緑化工事での外来種利用削減（埋土種子、飛来種子緑化工法の採用）、②樹木系廃棄物の発生現場での利用、③敷地内の緑地率の向上、④屋上緑化、壁面緑化の推進、⑤都市公園のビオトープ化、⑥自然石利用、近自然工法による河川改修、⑦地形を変形しない土木工事（愛知万博のグローバルループのイメージ）、⑧「JHEP」認証取得の推奨

5. 波及効果

計画段階から各主体が参画し、将来のまちの姿を共に描くためのコミュニケーションにより、主体間でビジョンの共有化が図られる。過程や成果の可視化も相まって、「私のまち」は「私がつくる」意識が高まり、広範な住民等の知恵と想いを結集できる。その結果、同じゴールを目指す様々な主体の自律的、主体的な活動が展開され、結果的に生物多様性保全に結び付く多くの選択肢が用意される。各自が自分のできる取組みに参加することで、自然や「地域」に対する関心も高まる。このような背景の中で、「地域」で決めた「仲間」を守るために始めた活動は、「仲間」も住める環境づくりに拡がり、「水と緑の回廊」が徐々に、しかしあちこちでつながり始める。取組みを通して人と人とのつながりも強くなり、「私の仲間」、「私もできる」等、保全の取組みが自分自身に関わりのあることとして感じられるようになる。森、里、海のつながりを、農林水産業やまちの暮らしと関連付けて考えることのできる人が増え、「里山」の暮らしと自然、文化を取り戻す地域が出現する。これらの結果、地域環境力が向上し、「つながり」のある、人も生き物も住みやすい「地域」によって構成される「愛する地」愛知になっている。

6. 最終報告会における議論

Q：「知多地域に絞った内容の提案だが、他の地域はどうするのか？」

A：具体的なフィールドとして今回は知多地域を取り上げて、地域計画の例として提案したものである。因みに知多には奥山や林業はないが、愛知県は海から山まで豊かな自然があり、地域毎にそれぞれ状況も異なる。そのため「モリゾー・キッコロの遊び場づくり計画」のイメージ図でも示したとおり、例えば鳳来寺ならブッポウソウを象徴として地域毎に計画を作ることを提案している。地域の状況は地元が一番把握しているであろうから、協力して地域計画を作れば良いのではないかと。

Q：「絶滅しそうな生物を何とかしようということか、現状を踏まえて捉え直そうということかどちらなのか？」

A：絶滅は不可逆的な問題であるから、勿論、助けられるものであれば助きたい。そのために具体的な工法等も提案している。しかし、里山の問題を考えても、実際には農業や林業、その後継者の問題等も含めて、総合的に考えなければ根本的な解決は図れない。その意味においては、後者である。

【引用文献】

- (1) モノづくり推進会議「ネイチャーテクノロジー研究会」ホームページ
- (2) 富山和子著「環境問題とは何か」PHP研究所
- (3) 「生命はつながっている 生物多様性を考えよう」環境省自然環境局
- (4) ㈱日立製作所編「ひたち 2008 Vol. 70 No.3 Summer」

【参考文献】

- (1) 環境経営学会編「生物多様性と企業経営」環境経営学会
- (2) 畠山武道、大塚直、北村喜宣著「環境法入門（第2版）」日本経済新聞社
- (3) 林良博監修「ジュニア地球白書」ワールドウォッチジャパン
- (4) 「図で見る環境・循環型社会白書（平成20年版）」環境省
- (5) 「里地里山保全再生計画作成の手引き」環境省自然環境局
- (6) 「平成20年版環境白書」愛知県環境部環境政策課
- (7) 「第3次愛知県環境基本計画」愛知県環境部環境政策課
- (8) 「あいちゼロエミッション・コミュニティ構想」愛知県環境部資源循環推進課
- (9) 「あいち自然環境保全戦略（仮称）について」愛知県環境部
- (10) 「生態系ネットワークの形成に向けて（検討会調査報告書概要版）」愛知県環境部
- (11) 「（仮称）知多都市計画 都市計画区域の整備、開発及び保全の方針」愛知県建設部
- (12) 「地方拠点都市地域ニューズレターNo.41」2006. 2. 28
- (13) 「週間エネルギーと環境No.2015」2008. 11. 20
- (14) 「週間エネルギーと環境No.2016」2008. 11. 27
- (15) 地域自然情報研究会セミナー「GCN通信第10号」2008. 6. 25
- (16) 愛知県副知事稲垣隆司「生物多様性とCOP10誘致構想」平成20年5月16日
中部森林開発研究会資料